

【取材調整可能・有識者(大学教員)のご紹介】

司法面接が証拠として採用された件数は、わずか1%にも及ばず

意外と知らない聴き取りに関する適切な行動 司法面接の基本

～子どもへの聴き取りによる負担を減らすために親ができることとは～

摂南大学 現代社会学部現代社会学科 田中 晶子（たなか あきこ）教授

摂南大学（大阪府寝屋川市、学長：久保康之）では、9学部17学科にわたる専門分野を持つ教員への取材を受け付けています。今回は、**摂南大学 現代社会学部 現代社会学科の田中晶子 教授**を紹介します。

司法面接※1は現在、年間約2000件実施されていますが、法務省（2022）の調査によると、2018年からの3年間で司法面接の録音・録画媒体が証拠として採用された件数はわずか35件にとどまっています。昨年12月に改正刑事訴訟法が施行され、一定の条件下で司法面接の録音・録画媒体が証拠にできるようになったことにより、今後は採用が増えることが予想されますが、司法面接はまだ一般には知られておらず、課題も多く残っています。

子どもが虐待や性被害、事件・事故の被害に遭っているのを打ち明けられた際、どのように話を聴けば良いのでしょうか？ 実は、子どもにたくさん質問したり、何度も聴き取りを行うことは、かえってマイナスに働く危険性があります。子どもは大人の発言に影響されやすく、認知発達も途上にあるため、誘導や暗示の影響を受けやすいからです。また、つらい体験を何度も話すことによって傷つく二次被害の発生や、繰り返し話すうちに別の出来事と記憶が混同し、正確なことが分らなくなる可能性があります。そのため、最初に被害に気付いた大人は最小限の聴き取りにとどめ、記録を残し、速やかに専門機関につなぎ、専門知識やスキルを持つ人から聴き取りを行うことが、その後の適切な対応を行う上で非常に重要な要素となります。

子どもから被害を打ち明けられた時やそのような被害を疑った時の子どもへの適切な接し方について、司法面接の面接手法の研究や、児童相談所や警察、検察を対象にした専門職の面接トレーニングに携わっている田中教授が解説します。ご取材希望の方は下記広報事務局までご連絡ください。

※1：虐待や事件、事故の被害を受けた疑いのある子どもから、事後の対応に生かすために、体験した出来事をできるだけ多く正確に話してもらい、聴き取りにおける負担を最小限にすることを目指す面接方法。国内では、児童相談所・警察・検察の三機関が中心となって連携しながら実施されている。

◆プロフィール

所属：現代社会学部 現代社会学科
職位：教授
学位・資格：博士（教育学）
研究分野：心理学（認知心理学、発達心理学、法と心理学）



田中 晶子 教授

◆お話しできること

・冤罪防止にも寄与！被害に遭っている子どもに出会った際の適切な行動

子どもから虐待や性被害、事件・事故の被害を打ち明けられた時や疑った時、何度も聴き取りを行うことは、適切ではないとされています。また、子どもに「お父さんに叩かれたの？」と言った、「はい/いいえ」で答えられる質問や大人が選択肢を示して選んでもらう「クローズド質問」も適切ではありません。冤罪の防止にも寄与する、司法面接で提案される子どもへの適切な関わりについて解説いただきます。

・オープン質問で自由報告を引き出す 司法面接の基本とは

司法面接は、専門機関との連携のもと原則1回行われ、対象となるのは3、4歳ごろからです。また、面接時間は子どもが集中できる時間を考慮し、年齢×5分程度と言われており、3歳の場合わずか15分程度を目安に計画されます。

短時間で自己紹介やラールの形成などの関係構築から、記憶を思い出して話す練習、本題の事件・事故の話題まで聴き取りを行います。面接官は話しやすい雰囲気でありながら淡々と話すといった、誘導とならないよう気を付けつつ一定の距離間を保ちながらも子どもに安心してもらう、専門知識やスキルが重要となります。

・【増加する児童ポルノ】1年間で2,789件の被害？被害を抑える子どもへの声掛けとは

司法面接を行う前、子どもは「自分が悪いことをして連れていかれる」「何を聴かれるのか怖い」という不安があります。そのため親や教師など同行する大人は、「前お話をしたことを詳細に話してきてね」や「頑張ってきてね」といった声掛けが重要となります。普段から「何かあったらいつでも聞かよ」といった声掛けや、オープン質問で子どもの話をよく聞いておくことがいざという場面で役立つかもしれません。警視庁の調査によると、2023年の児童ポルノ事犯は2,789件となり、インターネットの普及により被害が増大しています。※2 子どもの被害を最小限に抑えるためにも、オープン質問は普段から心がけておくことが重要です。※2：警視庁「令和5年における少年非行及び子どもの性被害の状況」

https://www.npa.go.jp/bureau/safetylife/syonen/pdf_r5_syonenhikoujyokyo.pdf

研修や講演、啓発コミックで被害児童の支援を目指す**【学歴】**

- ・1998年 京都府立大学 文学部 社会福祉学科卒業
- ・2000年 京都女子大学 文学研究科 博士前期課程 教育学専攻 修了
- ・2003年 京都女子大学 文学研究科 博士後期課程 教育学専攻 単位取得退学

【所属学会】

- ・日本心理学会
- ・法と心理学会
- ・日本発達心理学会
- ・日本子ども虐待防止学会

【委員歴】

- ・法と心理学会、「法と心理」編集事務局
- ・司法面接研究会副代表
- ・法と心理学会、理事

【論文】

- ・多専門・多機関連携による司法面接の展開(2)ー通達からの4年を振り返り、さらなる展開を考える
田中 晶子, 羽瀧 由子, 三原 恵, 仲 真紀子 法と心理 20(1) 79-86 2020年12月
- ・いじめや虐待被害の聴き取り：教育・保育機関職員を対象とした意識調査から
田中晶子 教育研究実践論集 9 11-21 2020年9月

【メディア】

- ・2023年11月18日 毎日新聞
児童虐待「聴く技術」学ぶ 摂南大教授講師に招き
面接手法など講義 県警児相から35人 / 滋賀

●コンテンツ「やさしい未来へ」Kindle版

田中教授は、司法面接の面接手法の研究を活かし、児童・生徒から被害を打ち明けられた時の接し方を学ぶ「教職員対象の研修会」や児童相談所や警察、検察を対象にした「専門職の面接トレーニング」に携わってきました（司法面接支援室<https://forensic-interviews.jp/>）。また、保育園・幼稚園、学校など教育現場での啓蒙活動にも力を入れています。一般の人にも広く司法面接について広めるべく、2024年6月に公益財団法人トヨタ財団2022年度研究プログラム「つながりがデザインする未来の社会システム ニューノーマル時代に再考する社会課題と新しい連帯に向けて」（研究代表者：大阪大学 綿村英一郎）の活動の成果物として、Kindle版コミック「やさしい未来へ」にて、司法面接や虐待被害を疑った時の聴き方について助言しました。

このコミックは、児童相談所や関係施設で働く人たちの視点から、児童虐待対応の難しさや市民一人ひとりができることを考える必要があることなどについて描かれています。ストーリーは、市民を対象とした意識調査や児童相談所職員へのインタビューなどの心理学的研究をもとに構成されています。

<https://amzn.asia/d/OitWJd7S>



本件に関わる内容を幅広くお話可能です。ご取材希望の方は下記広報事務局までご連絡ください。
※できる限り調整をさせていただきますが、取材のタイミングによってはお受けできない可能性もある旨ご了承ください。

【報道関係者様のお問い合わせ先】

摂南大学広報事務局（アンティル内） 担当：佐藤、水原、藤井
TEL：06-6225-7781 E-MAIL：setsunan_pr@vectorinc.co.jp